

特別支援教育におけるキャリア・パスポートの活用に関する 研修プログラムの開発と評価

Development and Evaluation of Training Programs for the Use of Career Passports in Special Needs Education

菊地 一文*・藤川 雅人**・杉中 拓央***

Kazufumi KIKUCHI*・Masahito FUJIKAWA**・Takuo SUGINAKA***

要 旨

本研究は、特別支援教育に携わる教員を対象としたキャリア・パスポートの活用促進を図るための研修プログラムを開発・試行し、実施前後においてキャリア・パスポートに関する認識の比較をするとともに、今後のキャリア・パスポートに関する研修会の実施に向けた基礎資料を得ることを目的とした。事前及び事後アンケートにおいて共通の調査項目であるキャリア・パスポートに関する認識の9項目について、Wilcoxonの符号付順位和検定を用いて有意差検定を行ったところ、全ての項目で有意な差が認められ、受講者のキャリア・パスポートに関する認識が高まったことが示唆された。また、プログラム全体では約8割が「とても役に立った」と回答し、講義だけでなく演習・協議等の形態を組み合わせることによる効果と、受講者の理解の深まりが推察された。

キーワード：キャリア・パスポート 研修プログラム 特別支援教育

I. 問題と目的

2017年及び2018年に公示された小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の学習指導要領では、総則の柱の1つである「発達を支える指導」及び「調和的な発達を支える指導」に「キャリア教育の充実」が示された^{10) 11) 12) 13) 14)}。「キャリア教育の充実」は、「学級活動及びホームルーム活動」「生徒指導」に次いで位置付けられており、これらの全てに共通する事項として「対話」の重要性が指摘できる。本総則を受け、各学校種別の学習指導要領における特別活動では、学級活動・ホームルーム活動の取り扱いについて、学校や家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の在り方、生き方を考えたりする活動を行うことや、その際に児童生徒が活動を記録し

蓄積する教材等を活用することを規定している。この「活動を記録し蓄積する教材等」が「キャリア・パスポート」である²²⁾。

文部科学省¹⁵⁾の「キャリア・パスポート例示資料等（以下、例示資料）について」では、キャリア・パスポートの定義を「児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオ」と示している。加えて「その記述や自己評価の指導にあたっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう

* 弘前大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Hirosaki University
** 島根大学教育学部
Faculty of Education, Shimane University
*** 東北文教大学人間科学部
Faculty of Human Sciences, Tohoku Bunkyo College

努めなければならない」と示している。また、キャリア・パスポートは教育委員会や各地域、各校でカスタマイズすることを前提としており、「特別支援学校においては、個別の教育支援計画や個別の指導計画等により、キャリア・パスポートの目的に迫ることができると考えられる場合は、児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた取組や適切な内容とすること」^{15) 16)} などが示されており、適切かつ柔軟に変更することが可能である。

これまでにキャリア・パスポートの活用に関する実践もいくつか報告されてきており、石羽根³⁾は、児童生徒の願いを踏まえた「願いシート」から児童生徒自身が取り組みたい内容を選択し、「目標シート」を教師と対話し作成することによって、目標の具体化や自己化につながったキャリア・パスポートの活用事例を報告している。鈴木²⁰⁾は文字や文章の理解が困難な重度の障害のある児童生徒に対して、写真やイラストなどの映像や動画、音声といった文字以外のもので学んだり、伝えたりするツールとして ICT 機器を活用したキャリア・パスポートの事例を報告している。

また、キャリア・パスポートは振り返りや対話的に関わるためのツールであるが、生徒同士または教師と生徒の対話的な関わりに着目した実践も報告されている。例えば、田中²¹⁾は、ホームルーム活動を中心とした目標設定や振り返りの場面において、PATH (Planning Alternative Tomorrows with Hope)²⁾ や TEM (Trajectory Equifinality Modeling) 図¹⁹⁾ の手法を参考としながら生徒同士が対話し共同的に取り組む授業実践とその積み重ねによる成果を報告している。岡本¹⁸⁾は、産業現場等における実習後を中心とした振り返りとしての「キャリアデザイン相談会」を設定し、生徒が学びの必然性を見出し、将来の目指す姿といまの学びをつなげられるよう支援してきたこととその成果を報告している。他にも野村¹⁷⁾がマンダラートの活用による、生徒同士での対話をとおした「なりたい自分」に向けた目標設定と振り返りの取組と、継続した振り返りの機会の必要性について報告している。

しかしながら、キャリア・パスポートの作成と活用に関する全国の特別支援学校（知的障害）の教員を対象にした調査⁹⁾では、キャリア・パスポートの活用事例や実践事例、対話のあり方の校内研修が今後必要であると報告している。菊地⁴⁾は、これまで特別支援学校は個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成、活用してきており、キャリア・パスポートと類似する点はあるものの、キャリア・パスポートの趣旨で

ある「児童生徒が作成し活用すること」や「対話を通して学びや育ちに気付かせるようにする」「学びをつなぐ」ということについては検討すべき課題であると指摘している。

従前から特別支援学校では個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成や活用に関する知見は蓄積されているものの、キャリア・パスポートの意義や目的を踏まえた活用方法や対話のあり方については十分ではないことが推測される。なお、これまでのところキャリア・パスポートの研修会に関する文献は見当たらない。

そこで、本研究は、キャリア・パスポートの活用に関する研修プログラムを開発・試行し、研修会前後においてキャリア・パスポートに関する受講者の認識の比較をするとともに実施内容や構成を検討し、今後のキャリア・パスポートに関する研修会実施のための基礎資料を得ることを目的とした。

Ⅱ. 方法

1 研修プログラムの目的

研修プログラムの目的は、基盤研究 (C) 「知的障害教育における可視化と対話の視点を踏まえたキャリア・パスポートの開発」(課題番号21K02678) で得た、知的障害特別支援学校におけるキャリア・パスポートの現状と課題に関する調査結果や研究協力校等における実践研究の知見を踏まえ、受講者の勤務校等における取組状況について意見交換するとともに、対話の充実を図るための実践報告や演習をとおして、今後のキャリア・パスポートの活用及びキャリア発達支援の充実に資する、とした。

2 研修プログラムの構成と内容

本研修プログラムは「キャリア・パスポート活用セミナー」(以下、CPセミナー) という名称で2023年9月16日から9月17日の2日間、A大学で行った。CPセミナーの日程と内容を表1に示す。なお、本研修プログラムの配列については、講義形式のインプットのみならず、実践解説や質疑応答、演習・協議等のアウトプットを交えてサイクルさせる、経験学習モデルを参考とした、インプットー実践・体験ーアウトプットモデルを踏まえた学習サイクル²³⁾を意図して構成した。

表1 キャリア・パスポート活用セミナーの日程と内容

1日目	内容
13:20～14:10	セッション①講義「キャリア・パスポートの意義と活用」
14:20～15:30	セッション②調査報告・情報交換「特別支援学校（知的障害）におけるキャリア・パスポートに関する調査報告」（30分）、「所属校や地域のキャリア・パスポートに関する情報交換」（40分）
15:40～17:30	セッション③実践報告「キャリアデザイン相談会の取組」（25分）、「PATHやTEM図の活用」（25分）、「願いシート・目標シートの活用」（25分）、「マンダラートやライフラインチャートの活用」（25分）、「グループでの意見交換」（10分）
2日目	内容
9:00～10:40	セッション④演習「PATHワークと省察」（100分）
10:50～12:30	セッション⑤演習「TEM図ワークと省察」（100分）
13:20～14:30	セッション⑥解説「対話チャートの解説と演習」（30分）、「PAC分析の解説と実践紹介」（20分）、「ICT活用の解説と実践紹介」（20分）
14:40～15:50	セッション⑦グループ協議・全体共有「実践アクションプランの検討・グループ協議」（50分）、「全体共有」（20分）

本研修プログラムにおける各セッションの概要は以下のとおりである。

セッション①講義「キャリア・パスポートの意義と活用」では、まず、キャリア教育推進による成果と課題を踏まえ、根幹となる概念である「キャリア発達」の理解を図った。次いで、キャリア・パスポートの目的・定義・内容について例示資料を基に解説するとともに、上述した学習指導要領の総則に示されている「対話」の重要性と「個別の指導計画の作成と内容の取扱い」に示されている自立活動における児童生徒本人にとっての「必要性」について確認した。以上を踏まえ、よりよい省察につなげるためのキャリア・パスポートの活用に向けた方策について提案した。

セッション②調査報告・情報交換「特別支援学校（知的障害）におけるキャリア・パスポートに関する調査報告」では、調査⁹⁾の概要について報告するとともに、セッション①を踏まえた「作成状況」「対話的なかわり」「家庭等との連携」「研修」「活用の成果と課題」等の8つの論点を示した。受講者はグループごとに任意の論点を取り上げ、キャリア・パスポートの取組に関する情報交換を図った。

セッション③実践報告では、本研究にかかわる研究協力校の4つの実践知見を取り上げて報告した。いずれも対話を促進させる「可視化」「具体化」「共有化」

「段階化」の4つの視点^{5) 8)}を踏まえた実践とした。受講者が具体的な実践イメージをもつことにより、これらの4つの視点の意義と効果について、後の演習をとおして理解が図られるよう考慮した。

セッション④演習「PATHワークと省察」及び⑤演習「TEM図ワークと省察」では、セッション③で報告した2つのワークをグループで実際に行うことでその手続きを習得するとともに、演習のポイントや児童生徒が実施する際の意義や課題について意見交換し、全体共有した。

なお、PATHのワークでは、「ポジティブ（Positive）」で可能（Possible）」な面に着目し、「将来」につながる「いま」の可視化をねらい⁷⁾、TEM図のワークでは、「多様な可能性を経ていまに至ったこれまでの価値」に着目し、本人理解を深めるための手法として「これまで」を踏まえた「いま」を可視化することをねらい⁷⁾、実施した。また、本セッションでは、受講者自身が児童生徒本人の「思い」や「願い」の理解に努めることや、グループ内での対話を重ねて共同的に目的に迫っていく体験をとおして、その重要性を実感できるようになることを意図し、研究分担者や協力者がファシリテートに努めた。

セッション⑥解説では、セッション④⑤と同様に、セッション③の報告内容に関連させた設定とした。報告内容の一部を実施したり、解説したりすることで、受講者が「可視化」「具体化」「共有化」「段階化」の4つの視点を取り入れる具体的な手がかりを得られるようにした。ICT活用の1つとしてのアプリや対話ツール、教員研修に関する事例について紹介したが、時間的な制約があるため、本セッションは参考として一部を体験または解説を聞く形式とした。

セッション⑦グループ協議・全体共有では、2日間の研修プログラム全体をとおして学んだことについて、KPT法を用いて勤務校等に活用していくためのアクションプランを作成し、共有した。

KPT法とは、①大切にしていること・工夫していること（Keep）、②課題となっていること（Problem）、③今後試行してみたいこと（Try）の3点を書き出し、共有し、チームで解決方策を検討するものであり、ミーティングが終わった後に具体的に何をすればよいのかが明確になる方法である。

なお、本研修プログラムでは、一定のプログラムを受講して終わりではなく、学んだことをどのように活用するかについて自ら描き、実践していくことを意図した。また、グルーピングについても対話が促進され

やすい5人程度とし、受講者の所属や担当学部等を考慮しつつ、目的に応じて同傾向の構成にしたり、敢えて異なる構成にしたりし、多様な学びが展開されるよう意図した。

3 対象

本研修プログラムは、調査に協力した全国特別支援学校知的障害教育特別支援学校長会加盟校への周知のほか、キャリア発達支援研究会のWebサイトで周知した。受講者は、全国の特別支援学校（知的障害）の教員、自治体の特別支援教育に携わる行政職員、教職大学院現職教員院生、大学教員の計27人であったが、研修会前後ともにアンケートに回答した25人を分析対象とした。

4 調査項目

事前及び事後アンケートにおいて共通した調査項目は、受講者の属性に関する4項目（所属、教職経験年数、特別支援学校・特別支援学級・通級による指導の経験年数、自校の所属学部におけるキャリア・パスポートの作成の有無）とキャリア・パスポートに関する認識の次の9項目とした。「キャリア・パスポートの目的を理解している」、「キャリア・パスポートの定義を理解している」、「キャリア・パスポートと個別の諸計画（教育支援計画・指導計画）の相違点を理解している」、「キャリア・パスポートにおいて対話的に関わる重要性を理解している」、「キャリア・パスポートにおいて対話的な関わり方を知っている」、「キャリア・パスポートにおいて対話的な関わり方ができる」、「キャリア・パスポートにおいて対話を促進させるツール等（具体的な方法）を知っている」、「キャリア・パスポートの様式を自校の児童生徒の実態に応じてカスタマイズできる」、「キャリア・パスポートのキャリア教育への生かし方がわかる」。

事後アンケートのみの調査項目は、セッション①から⑦と研修会全体の有用性の8項目、自校で導入したいセッションを問う1項目であった。また、「研修会の全体評価の理由」、「研修会の改善点や工夫点」、「研修会によって新たに気づいた点や深く考えるようになった点」、「キャリア・パスポートをどのように活用していきたいか」の4項目について自由記述で回答を求めた。

5 分析方法

事前及び事後アンケートにおいて共通した調査項目

であるキャリア・パスポートに関する認識の9項目は、とてもそう思う：6点、そう思う：5点、少しそう思う：4点、あまりそう思わない：3点、そう思わない：2点、全くそう思わない：1点で得点化し、研修会前後の比較は、Wilcoxonの符号付順位和検定を用いて有意差検定を行った。事後アンケートのみの調査項目は、セッション①から⑦と研修会全体の有用性の8項目は、とても役に立った、役に立った、少し役に立った、あまり役に立たなかった、役に立たなかった、全く役に立たなかった、の6つの選択肢を設定し、単純集計した。また、セッション①から⑦の中から自校で導入したいセッションを問う1項目は、複数回答可とし単純集計した。事後アンケートの自由記述については、記述内容を切片化したものをカテゴリーに分け、集計した。

6 倫理的配慮

アンケート配布時に本研究の目的や内容を対象者に十分説明し、研究についての同意を得た。また、個人情報取り扱いや匿名性には十分配慮した。

III. 結果

1 対象者の属性

対象者の属性は、小学部1人、中学部2人、中学部・高等部1人、高等部10人、管理職6人の特別支援学校教員20人、指導主事の行政職員3人、大学院生1名、大学教員1人の計25人であった。また、行政経験を含む教職経験年数は最大値39、最小値9、平均値と標準偏差は 23.16 ± 9.71 であった。教職経験年数のうち、特別支援学校・特別支援学級・通級による指導の経験年数は、最大値39、最小値0、平均値と標準偏差は 17.32 ± 10.20 であった。なお、自校の所属学部におけるキャリア・パスポートの作成の有無については、「作成している」が17人、「作成していない」が1人、「作成に携わっていない」が7人であった。

2 キャリア・パスポートに関する認識の変化

事前及び事後アンケートにおいて共通した調査項目であるキャリア・パスポートに関する認識の9項目について、Wilcoxonの符号付順位和検定を用いて有意差検定を行ったところ、「キャリア・パスポートの目的を理解している」($p < .001$)、「キャリア・パスポートの定義を理解している」($p < .001$)、「キャリア・パスポートと個別の諸計画（教育支援計画・指導

表2 キャリア・パスポートに関する認識の変化

項 目	研修前 研修後	平均値	中央値	25%ile	75%ile	p 値
キャリア・パスポートの目的を理解している	研修前	4.5	5.0	4.0	5.0	0.0001
	研修後	5.4	5.0	5.0	6.0	
キャリア・パスポートの定義を理解している	研修前	4.2	4.0	4.0	5.0	0.0000
	研修後	5.3	5.0	5.0	6.0	
キャリア・パスポートと個別の諸計画（教育支援計画・指導計画）の相違点を理解している	研修前	4.2	4.0	3.5	5.0	0.0002
	研修後	5.2	5.0	5.0	6.0	
キャリア・パスポートにおいて対話的に関わる重要性を理解している	研修前	4.9	5.0	4.0	6.0	0.0005
	研修後	5.8	6.0	6.0	6.0	
キャリア・パスポートにおいて対話的な関わり方を知っている	研修前	4.2	4.0	3.0	5.0	0.0014
	研修後	5.2	5.0	5.0	6.0	
キャリア・パスポートにおいて対話的な関わり方ができる	研修前	4.0	4.0	3.0	5.0	0.0054
	研修後	4.8	5.0	4.0	5.0	
キャリア・パスポートにおいて対話を促進させるツール等（具体的な方法）を知っている	研修前	3.7	4.0	3.0	4.0	0.0001
	研修後	5.2	5.0	5.0	6.0	
キャリア・パスポートの様式を自校の児童生徒の実態に応じてカスタマイズできる	研修前	4.0	4.0	3.0	4.5	0.0010
	研修後	4.7	5.0	4.0	5.0	
キャリア・パスポートのキャリア教育への生かし方がわかる	研修前	4.2	4.0	3.5	5.0	0.0007
	研修後	5.2	5.0	5.0	6.0	

計画)の相違点を理解している」($p < .001$)、「キャリア・パスポートにおいて対話的に関わる重要性を理解している」($p < .001$)、「キャリア・パスポートにおいて対話的な関わり方を知っている」($p < .01$)、「キャリア・パスポートにおいて対話的な関わり方ができる」($p < .01$)、「キャリア・パスポートにおいて対話を促進させるツール等（具体的な方法）を知っている」($p < .001$)、「キャリア・パスポートの様式を自校の児童生徒の実態に応じてカスタマイズできる」($p < .01$)、「キャリア・パスポートのキャリア教育への生かし方がわかる」($p < .001$)の9項目全てで有意な差が認められた。結果を表2に示す。

3 事後アンケートにおける各セッションと研修プログラム全体の有用性

セッション①～⑦について、「とても役に立った」、「役に立った」、「少し役に立った」、「あまり役に立たなかった」、「役に立たなかった」、「全く役に立たなかった」の6つの選択肢で質問したところ、セッション①（講義）は「とても役に立った」21人、「役に立った」4人であった。セッション②（調査報告・情報交換）は「とても役に立った」17人、「役に立った」7人、「少し役に立った」1人、セッション③（実践報告）は「とても役に立った」19人、「役に立った」

表3 各セッションと研修プログラム全体の有用性

	とても役に立った	役に立った	少し役に立った	あまり役に立たなかった	役に立たなかった	全く役に立たなかった
セッション① (講義)	21	4	0	0	0	0
セッション② (調査報告・情報交換)	17	7	1	0	0	0
セッション③ (実践報告)	19	5	1	0	0	0
セッション④ (演習)	24	1	0	0	0	0
セッション⑤ (演習)	22	3	0	0	0	0
セッション⑥ (解説)	15	8	1	1	0	0
セッション⑦ (グループ協議・全体共有)	15	9	1	0	0	0
研修プログラム全体	20	5	0	0	0	0

(人数)

5人、「少し役に立った」1人、セッション④（演習）は「とても役に立った」24人、「役に立った」1人、セッション⑤（演習）は「とても役に立った」22人、「役に立った」3人、セッション⑥（解説）は「とても役に立った」15人、「役に立った」8人、「少し役に立った」1人、「あまり役に立たなかった」1人、セッション⑦（グループ協議・全体共有）は「とても役に立った」15人、「役に立った」9人、「少し役に立った」1人であった。結果を表3に示す。

研修会全体について、「とても役に立った」、「役に立った」、「少し役に立った」、「あまり役に立たなかった」、「役に立たなかった」、「全く役に立たなかった」の6つの選択肢で質問したところ、「とても役に立った」20人、「役に立った」5人であった。結果を表3に示す。

4 事後アンケートにおける自校で導入したいセッション

全セッションの中で、自校で導入したいセッションについて複数回答可で質問したところ、セッション①（講義）は11人、セッション②（調査報告・情報交換）は2人、セッション③（実践報告）は12人、セッション④（演習）は19人、セッション⑤（演習）は15人、セッション⑥（解説）は8人、セッション⑦（グループ協議・全体共有）は7人であった。結果を表4に示す。

表4 自校で導入したいセッション（複数回答可）

セッション	人
セッション①（講義）	11
セッション②（調査報告・情報交換）	2
セッション③（実践報告）	12
セッション④（演習）	19
セッション⑤（演習）	15
セッション⑥（解説）	8
セッション⑦（グループ協議・全体共有）	7

5 事後アンケートにおける自由記述の回答

事後アンケートの自由記述として、「研修会の全体評価の理由」は、回答者数22人であり、「演習によって理解が深まったため」、「キャリア・パスポートの意義や対話の重要性を理解できたため」などがあつた。結果を表5に示す。

表5 研修プログラムの全体評価の理由

カテゴリー	件数
演習によって理解が深まったため	12
キャリア・パスポートの意義や対話の重要性を理解できたため	10
実践例によってヒントやアイデアを得ることができたため	9
他校や他の自治体の取組状況について情報共有ができたため	3
同じ立場（職位）のグループ編成のため、同じ視点をもったり、デイクッションをしたりすることができたため	3
研修会の構成が理論から演習へと理解しやすかったため	2

「研修会の改善点や工夫点」は、回答者数8人であり、「各校のキャリア・パスポートの様式や実践例を知りたい」などがあつた。結果を表6に示す。

表6 研修プログラムの改善点や工夫点

カテゴリー	件数
各校のキャリア・パスポートの様式や実践例を知りたい	2
休憩時間を長くしてほしい	2
もっと長い時間設定してほしい	1
上手いかなかった実践も知りたい	1
ICTの活用について実践や演習をしたい	1
PATHに特化した研修を受講したい	1

「研修会によって新たに気づいた点や深く考えるようになった点」は、回答者数24人であり、「子どもとの対話の重要性」、「子ども理解の深化」などがあつた。結果を表7に示す。

表7 新たに気づいた点、深く考えるようになった点

カテゴリー	件数
子どもとの対話の重要性	17
子ども理解の深化	14
キャリア・パスポートの有用性	10
教員の学びの必要性	7
通常の学級における取組	1

「キャリア・パスポートをどのように活用していきたいか」は、回答者数24人であり、「子どもと対話的にかかわるためのものとして」、「子どもが自己理解す

るためのものとして」などがあった。結果を表8に示す。

表8 キャリア・パスポートの今後の活用方策

カテゴリー	件数
子どもと対話的にかかわるためのものとして	11
子どもが自己理解するためのものとして	9
子どもを理解するためのものとして	6
教員間や学部間をつなぐツールとして	3
研修会で学んだポイントや研修を通して	3
継続的、連続性のあるものとして	2

IV. 考察

1 キャリア・パスポートに関する認識の変化

事前及び事後アンケートにおいて共通した調査項目であるキャリア・パスポートに関する認識の9項目について、Wilcoxonの符号付順位検定を用いて有意差検定を行ったところ、全ての項目で有意な差が認められたことから、参加者のキャリア・パスポートに関する認識が高まったことが示唆された。質問項目のうち、キャリア・パスポートの目的や定義、個別の諸計画との相違点、対話的な関わり的重要性、対話的に関わる方法、対話を促進させるツール、キャリア・パスポートのキャリア教育への生かし方については、知識に関する項目であり、研修会を通して受講者がその知識を獲得したことが推測される。一方で、「キャリア・パスポートにおいて対話的な関わり方ができる」と「キャリア・パスポートの様式を自校の児童生徒の実態に応じてカスタマイズできる」の項目は研修後も平均値が4点台であった。これらの項目は、児童生徒と対話的に関わるという実践を伴う内容と自校のキャリア・パスポートの様式の変更を伴う内容であったことが要因として考えられる。今後、対話的な関わりと省察に焦点化した研修会を設定する必要があるだろう。

2 各セッションと研修プログラム全体の有用性

セッション④（演習）とセッション⑤（演習）は約9割が「とても役に立った」と回答した。セッション④（演習）はPATHワークと省察、セッション⑤（演習）はTEM図ワークと省察であり、PATHやTEM図を説明するだけでなく、演習といった形態によって理解が深まり、有用性を実感したことが推察される。また、事例を取り扱うことにより、児童生徒が学習目的の自己化を図るための有効なアプローチとしてPATH

やTEM図の可能性が認識されたことが推察される。本研修プログラムで設定した全てのセッションにおいて、約6割以上が「とても役に立った」と回答しており、研修プログラム全体では約8割が「とても役に立った」と回答している。キャリア・パスポートセミナーの実実施時点のキャリア・パスポートの活用の状況において、本研修プログラムは有用性があったと考えられる。

3 自校で導入したいセッション

自校で導入したいセッションは、回答が多かった順にセッション④（演習）19人、セッション⑤（演習）15人、セッション③（実践報告）12人、セッション①（講義）11人と続いた。有用性が高いセッションと自校で導入したいセッションの順は、ほぼ同様の結果となった。有用性の高かったセッションについては、自校で導入するための運営方法やマニュアルの作成が考えられる。なお、本研修プログラムは管理職や指導主事等の行政職も参加しており、キャリア・パスポートの活用の促進に向けた研修が各校で実施されることを期待したい。

V 今後の課題と展望

本研究では、これまで実施してきた調査研究や文献研究、研究協力校等における実践研究で得られた知見を踏まえ、特別支援学校等においてキャリア・パスポートの活用を図るための研修プログラムを開発・試行し、その評価を行った。その結果、サンプルサイズの課題や、詳細な分析まで至っていないという制約があるものの、一定の成果が確認された。今後、試行を重ね、研修プログラムの内容や方法を精査し改善を重ねることで、妥当性の向上を図り、各学校のニーズに応じたフィッティングを図っていく必要がある。特に多忙な学校現場においては、研修に割ける時間が限られていることから、時間的な制約を踏まえた効果的な実施に向けた工夫が必要と考える。

今後、キャリア・パスポートの活用を図っていく上で、特に留意すべきこととして、「本人主体」の意識化が挙げられる。

キャリア・パスポートは、「自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオ」であり、その目的は、「自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現に

つなぐ」ことである。本来、ポートフォリオとは、絵描きが自身の自信作をファイルした紙ばさみのこと、とされており、キャリア・パスポートにおいても、単にファイリングするのではなく、児童生徒が多様な学びの中から、意味付けや重み付けをした結果、選択したものを収納すべきである。その前提として、教師は児童生徒主体のよりよい学びの実現が求められ、学びをととした「対話」が肝要となる。

なお、例示資料の「指導上の留意事項と管理」には、「記録の活動のみに留まることなく、記録を用いて話し合い、意思決定を行うなどの学習過程を重視すること」、「大人（家族や教師、地域住民等）が対話的に関わること。記録を活用してカウンセリングを行うなど、児童生徒理解や一人一人のキャリア形成に努めること」、「学びの振り返りや見通しに生かすこと」、「校種間の引き継ぎは、原則、児童生徒を通じて行うこと。（中略）児童理解、生徒理解に活用すること。」¹⁶⁾と示されていることについても再確認したい。

また、障害による学習上又は生活上の困難を有する児童生徒については、特別の指導領域として教育課程に「自立活動」が位置付けられるとともに、個別的教育支援計画と個別の指導計画の作成と活用が義務付けられている。個別の指導計画の作成と内容の取扱いに関する留意事項¹²¹⁴⁾においても本人主体・本人参画の必要性を示唆する記載があり、「本人にとっての必要性」や、そのための「安心でき、信頼できる関係性を土台とした教師と児童生徒との『対話』、そして児童生徒同士の『対話』」が不可欠である⁶⁾。この点についても今後のキャリア・パスポートの効果的な活用が期待される。

このようなキャリア・パスポートの意義を踏まえ、効果的な活用を図っていくためには、教師自身の協働的な学び合いが不可欠である。教師に求められる学びが児童生徒の学びと相似形であること¹⁾を踏まえ、意識化を図っていくことが必要である。このことは、キャリア教育が「キャリア発達を支援する教育」であることや、その視点を踏まえて「教育活動の改善を図る」という理念をもつものであることにも通じ、キャリア発達の相互性とも重なるものと考えらる。

付記

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）21K02678）の助成を受けた。

文献

- 1) 中央教育審議会（2022）「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）。
- 2) 干川隆（2002）教師の連携・協力する力を促すグループワーク－PATHの技法を用いた試みの紹介－。知的障害養護学校における個別の指導計画とその実際に関する研究。国立特殊教育総合研究所知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室一般 研究報告書，43-47。
- 3) 石羽根里美（2022）いまの学びと自己の将来をつなぐキャリア・パスポートの活用－ツールを活用した目標の可視化と行動の具体化－。特別支援教育研究，784，20-23。
- 4) 菊地一文（2021）キャリアデザインの視点に基づく学級経営・ホームルーム経営の在り方。全国特別支援学校知的障害教育校長会（編著），知的障害教育における「学びをつなぐ」キャリアデザイン。ジアース教育新社，32-37。
- 5) 菊地一文（2022）対話をととして児童生徒の「これまで」と「いま」と「これから」をつなぐキャリア・パスポートの可能性。特別支援教育研究，784，28-31。
- 6) 菊地一文（2023）確かな力が育つ知的障害教育における「自立活動」。特別支援教育研究，794，8-11。
- 7) 菊地一文（2023）個別の指導計画の活用に関する諸課題の解決に向けた本人中心アプローチ－PATHやTEM図を活用した演習等を踏まえて－。生活中心教育研究，38，22-29。
- 8) 菊地一文（2023）肢体不自由教育におけるキャリア・パスポートの意義と活用。肢体不自由教育，262，6-11。
- 9) 菊地一文・藤川雅人・杉中拓央（2023）キャリア・パスポートの作成と活用に関する実態調査報告書。
- 10) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領。
- 11) 文部科学省（2017）中学校学習指導要領。
- 12) 文部科学省（2017）特別支援学校幼稚園部教育要領小学部・中学部学習指導要領。
- 13) 文部科学省（2018）高等学校学習指導要領。
- 14) 文部科学省（2019）特別支援学校高等部学習指導要領。
- 15) 文部科学省（2019）キャリア・パスポート例示資料等について。https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2019/08/21/1419890_002.pdf（参照2022/11/11）。
- 16) 文部科学省（2020）キャリア・パスポートQ&A（令和4年3月改訂）。https://www.mext.go.jp/content/20220314-mxt_jidou01-000007080_1.pdf（参照2023/9/1）
- 17) 野村直樹（2023）知的障害特別支援学校におけるホームルーム活動を中心としたキャリア発達を促す授業実践－「なりたい自分」を踏まえて生徒が設定する目標と共同的な振り返り－。弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）年報，5，257-266。
- 18) 岡本洋（2023）生徒と教員の対話を通して進めるカリキュラム・マネジメント。キャリア発達支援研究，9，

- 122-127.
- 19) サトウタツヤ (2009) TEM ではじめる質的研究－時間とプロセスを扱う研究をめざして－. 誠信書房.
- 20) 鈴木章裕 (2022) GIGA 環境を活かしたキャリア・パスポートの展開－アクセシブルな様式を目指して－. 特別支援教育研究, 784, 16－19.
- 21) 田中美紀 (2023) 知的障害のある生徒に対するキャリア発達を促すホームルーム活動の在り方に関する研究－目標設定, 振り返りと対話に着目して－. 弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻 (教職大学院) 年報, 5, 107-116.
- 22) 丹野哲也 (2022) 特別支援教育におけるキャリア教育の充実とキャリア・パスポート活用の意義. 特別支援教育研究, 784, 4-7.
- 23) 土岐賢悟・菊地一文 (2022) 発展科目「特別支援教育の授業デザイン」における授業展開とその効果の検討－インプット－実践・体験－アウトプットモデルを踏まえた学習サイクルを通して－. 弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻 (教職大学院) 年報, 4, 7-16.
- (2024. 1. 10 受理)